

「俳句をよもう」という教材タイトルには、「読もう」と「詠もう」が掛けられています。他人が作った俳句作品の鑑賞をする活動と、自分自身で俳句作品を創作する活動が目的です。俳句は、子どもにとって、鑑賞においても、創作においても、もっとも親しみやすく、達成可能な言語活動だと思います。鑑賞と創作を通して、他人と、自分の心の中にあるものに、気づいてもらえればと思っています。

## 1 俳句の鑑賞について

春夏秋冬の各季節ごとに、20句ずつ鑑賞句をあげています。いずれも、古今の名句として知られる俳句ですが、以下のような基準で選定しました。



### ①五・七・五の定型になっている俳句

五・七・五17音のリズムを覚えてもらうために、字余り・字足らず・自由律の俳句は、混乱しやすいと判断し、含めませんでした。

### ②子どもにもイメージしやすい俳句

比較的親しみやすいことばが使われていたり、内容が子ども自身の生活体験に重ねられるような俳句を選びました。(そのような句を選ぼうとすると、時代に関わらず、芭蕉・蕪村・一茶・子規の句ばかりが入ります。「平明」が名句の条件であることを実感しました。)

### 《鑑賞句の「解釈」パートについて》

鑑賞句には、教材制作者の個人的な解釈が、一例としてつけられています。内容は、その俳句が詠まれた状況や時代に必ずしも沿ったものではありません。子どもが少しでもイメージしやすいように現代の風俗やことばに置き換えているものもあります。

## 2 俳句の創作について

鑑賞句の中から、ことばをひとつ取り出して、それをテーマに俳句を作る活動です。準備として、課題Ⅰ・Ⅱを設定しましたが、それだけではできないことが多いかと思えます。ことばのテーブルで、子どもが俳句を作れるようになる過程を見ていると、大人に援助してもらいながら共作しているうちに、少しずつ自分のことばが出て来るようになることが多いようです。

### 【季語・季節について】

鑑賞句は、季語・季節が解説してありますが、子どもの俳句作りにおいては、季語入れは難しいと思います。季節感も自己形成の大切な要素ですが、まずは自分の心の中のもの表現することが重要だと考えています。



### 【俳句作りのコツ】

俳句を作る上で、意外と大切なのが、「アバウトさ」のようです。思い浮かんだ語句や内容の整合性に拘泥せず、5・7・5の音に、適当にことばを入れて行ける子どもは、どんどん俳句が作れ、また生き生きとした表現が生まれるようです。一見、唐突で、でたらめなようでも、ことばは何らかのつながりを持って紡ぎだされ、子どもの心を映し出しています。俳句は、本来勉強ではなく、娯楽です。出来不出来や好き嫌いであっても、そこに正解・不正解はありません。俳句の学習は、あくまでも子どもの自主性に支えられていなければならないと思います。